



～9月になりました。防災の日に想う～

始業式から暑い日が続いています。先週から、給食も始まり通常の6時間授業も再開しました。今月は、17日に体育大会が行われます。来賓、保護者の皆様の参観はありませんが、初めての学校全体で行われる行事です。コロナウイルス対策、熱中症対策など、万全を期して行いたいと思っています。がんばりましょう。

さて、今日は9月1日、防災の日です。この日は、1923年9月1日に発生し、10万人以上の死者・行方不明者を出した「関東大震災」が起こった日で、この日に由来しています。

2011年3月11日。東北を中心に発生した東日本大震災から9年経ちました。皆さんは、最近では2018年の大阪北部地震なら覚えていると思います。この時、2018年に大阪市で地震が起こる確率は、55%から56%と言われていました。また、2016年に起きた熊本地震については、2014年に予測されていた確率は7%から8%でした。ずいぶん少ない確率だったのに地震は起こりました。そして、南海トラフで発生する地震が、30年以内に起きる確率は70%と言われています。これはすごい確率だということをまず理解してください。

そこで、地震について考えてみたいと思います。昨年、日本赤十字社のある方からお話を聞く機会がありました。その方は1994年1月17日に起きた阪神淡路大震災で家族も亡くされています。家は倒壊し、家族を助け出してくれたのは、近所にすむ方々で、公的機関も大ダメージを受け、その時の助けにはならなかったそうです。防災・減災を考えると、災害に必要な3つの役割があります。「自助」「共助」「公助」です。

「自助」とは…自分の命は自分で守る。すべての人がまず自分の身を守るために全力を尽くさなくてはなりません。自分がけがをせず生き残ることで



「共助」とは…家族や近所の安全が確認できたら、次は、地域の安全はみんなで守る。自主防災組織のような地域コミュニティを中心とした単位で助け合うことです。

「公助」とは…国や自治体、防災機関による救助・災害支援活動のことです。災害の規模が大きくなるほど、公助による住民への迅速な援助は期待できません。効果的な公助の展開には、発災後、1週間はかかると考えておく必要があります。聞いたことがあるかもしれません。



さて、阪神淡路大震災のときの神戸市消防局のアンケートによると、「誰が救助にあたったのか。」の内訳では、「近所の人」が60.5%、「救助隊」は2.4%でした。

大きな災害に襲われると、お年寄りや障がいのある方だけではなくどんな人も「災害弱者」になる可能性があります。大学生や単身赴任のサラリーマンもいざという時に、被災地の真ただ中に取り残されてしまいます。できる限りの「自助」で生き残ることができれば、学校、地域、職場、親戚などの助け合いが大切なのです。地域の絆が助ける力になります。ここで、「共助」の大切さについて2つの例を出します。

1つ目は、阪神淡路大震災のとき、淡路市豊島地区では11時間後に自衛隊員が到着するまでに生存、亡くなったすべての人々の救出を終えていました。

2つ目。神戸市長田地区では、地震後火事が起こりましたが、消防車は来ない。防火水も不足し、消防団中心に若い人たちが駆け付け、消火器を手にして、火を消し止めたそうです。現場には、100本以上の消火器が転がっていたそうです。

～「共助」はできることからする～

広い地域が大きな災害に見舞われたとき、消防も、救急も、警察もすぐにはやってきません。震災を経験された方も「1時間に1回くらいしか救急車とすれ違わなかった。」と言います。自衛隊などの救援がやってくるには、さらに時間がかかります。大切なのは、「一人ひとりができることからする。」ということです。

消防の方も、ひっきりなしの電話に加え、近所の人から「来てくれ。」とやってくる。こうなると組織だって動くことができない状態になります。助かる命も助からない。だからこそ、「自助」そして「共助」が大切であるということを心に留め置いてください。

～語り継ぐこと 想像力が大切～

NHKアナウンサー 住田功一氏は、たまたま神戸市に帰省中、阪神淡路大震災に遭い、そこから3週間、現地で取材をされたそうです。震災直後は、「自分にもっとできることはなかったのか」と、思い悩んだそうです。神戸の取材を終え、1か月後に東京に帰ったとき、同僚から「お疲れさま」と声をかけられ、ほっとしたのですが、慰労に「イタリア料理でも食べにいこうか。」と声をかけられたのにはとまどったそうです。

神戸では、まだ配給のお弁当を食べている人が何万人といて、市の中心部では、ガスがほとんど復旧せず、何十万人という人が炊事することさえも難しい時期だったからです。

また、震災の3日後、ビルが崩れ落ち、焼け野原が広がった神戸での取材テープを抱えて、やっとの思いで船に乗り、大阪の天保山の岸壁にたどり着いたとき、海に面した美術館のガラス張りの喫茶店で若い2人がお茶を飲んでいるのです。阪神淡路大震災の混乱の中、わずか40km離れただけの大阪は、まったくいつも通りの生活が続いていたのです。場所が違えば、状況もちがいます。でも、あまりの違いに「いったいどういうこと？」と目を疑ったそうです。

大切な人を亡くした、いろんなものを失った悲しみは当事者にしかわかりません。でも、少しでもわかり合う事が大切で、人の心と同じになれなくても、その一部でもいいから分かり合えることができると思うのです。自分が経験したことの無いものを、補っていくものが、想像力だと思います。本を読んだり、いろんな人と話したり、自分の思いを書いたりして、想像する力をつけてください。

それとともに大切なことは、情報を得ること。記録をすること。語りつぐこと。私たちが心にとどめ、私たちが新たな困難に直面したとき、人の命を守るためにその経験を活かすことが大切です。

防災や減災について、図書館でも本がいろいろ置いてありますので、読んでみてください。そして、学んでください。

(校長 織田容子)

～今後の予定～

月日	予定	期間
9/3(土)	眼科検診(2年生、1・3年は抽出)	
9/8(火)	内科検診	～10(木)
9/15(火)	体育大会 予行	
9/16(水)	体育大会準備(午後)	
9/17(木)	体育大会(午前)※昼食必要 片付け(午後)	
9/30(水)	耳鼻科検診(2年・1、3年は抽出)	



PTAより ～お知らせ～

いつもPTA活動にご理解、ご協力いただきありがとうございます。

◎来年度のPTA役員立候補推薦用紙の締め切りが9月3日(木)となっております。ご協力をお願いします。

◎8月より、朝の交通安全指導を会員の皆様をお願いしております。今年度は、1回目の協力のお願いに皆様が快く協力の申し出をしてくださったおかげで、来年4月までの担当を決めることができました。ありがとうございました。

朝の交通安全指導は、交通安全の見守りはもちろん、防犯の面からもなくてはならない大切な活動です。朝のお忙しい時間帯ですが、皆様のご協力をよろしくお願いします。

大人の気づきが、子どもの気づき・行動・成長に

人間は、経験を通してたくさんの事を学びます。そして、学びや経験を、日々の出来事に活用します。経験をもとに、今後起こりそうな事を予測して、具体策を講じてそれに備えます。

そのほとんどは、良い結果を出すための準備です。目的や目標を達成するために努力すること、一度経験した失敗を二度と繰り返さないために事前の備えをしたり、危険を回避する術を身につけたりすることなど…。行動を変化させるきっかけとして、そこには必ず、「気づき」があります。「ここが良かった」あるいは「ここが失敗した原因だった」、「ここを改善すればうまくいく」というように、気づきによって自分の意識や行動を変化させ、引いては習慣や性格が変わり、「より良い人生」を導くこととなります。

人は、どれだけ気づきに出会えるかによって、自分の人生はもちろん、自分に関わる人間、特に子どもと関わる大人は、子どもの人生を大きく左右すると思います。従って、「同じ出来事」であっても、それで「何に気づいたか」によって、受け止め方や学ぶ内容、今後の行動は大きく変わってきます。反対に、「何も気づかなかった」とすれば、その出来事からは何も学ぶことができなかつたということにもなります。つまり、人間の成長には、視覚・聴覚といった、いわゆる五感をいかに働かせるかが大切なのではないでしょうか。

野生の動物たちは、草原のはるか数キロ先の獲物を得るために、また天敵から身を守るために、感覚を研ぎ澄ませ、常に行動できる準備をしています。人間であっても、子どもが成長する過程において、特に幼少期は、子どもを怪我や病気から守るべく、様々な知識や知恵を我が子に与えます。失敗させてからその原因に気づかせる場合もあれば、命に関わる場面ではその直前に大声で、そして体を張って注意する場合もあるでしょう。いずれにせよ、生命を安全に保つための「気づき」を養います。

そして、ある程度成長すれば、次は心の成長を充実させるための「気づき」が必要となります。物の豊かさばかりが目立ち、心の豊かさが形成されにくいとされる現代においても、「気づき」しだいで心は十分に成長できるものです。特に、心の成長が著しい中学生にとって、「周囲の大人の気づき」は大きな影響を与えます。私たち大人が五感を研ぎ澄ませ、「気づく力」と「子どもに気づかせる力」を養うことが大切だと考えます。同時に、子どもの気づきも大切に。大人が気づかないことに、子どもが先に気づいている事は多くあります。

自然の移り変わりに気づき、人間の衣食住を支える自然の偉大さに気づく。人々が過ごしやすいように、緑化活動や清掃にたずさわる人の存在に気づく。食事や衣服の洗濯など、自分のために支えてくれている有難さに気づく。本との出会いによって、そこから日常生活へのヒントに気づく…など。

「人間の最大の敵は鈍感である。」これは、長年、プロ野球界で活躍された野村克也氏がよく口にされた言葉です。いま、鈍感であることは、命を危険にさらすことが感染症の拡大状況からも明らかです。中学生の子どもたちには、自分で気づく力や、課題を解決しようとする力をつけさせることが、学習意欲やスポーツ・文化活動へのモチベーションにつながり、大人に促されずとも自ら成長するきっかけを作ることとなります。また、親を始め、大人の存在や大人の気づきから自分の今ある環境に感謝の心が芽生え、いずれはそれを行動で返そうとするようになるでしょう。その日が来るまで、私たち、大人がしっかりと気づきのアンテナを張り、まず自らを磨き続けることを心掛けたいものです。



(こども支援コーディネーター 横井武志)